2 ビハーラ活動者養成研修会の調査報告（第19期～26期）

ビハーラ活動者養成研修会修了者へのアンケートにかかる調査

ビハーラ活動者養成研修会修了者283人［19期～26期 2008（平成20）年～2016（平成28）年：第26期を補講にて修了した者を除く］に対して、2018（平成30）年10月～12月に宗派社会部からアンケートを郵送し回答を求めた。回答は150人から得られた。回答の中には欠損が見られる回答もあったが、全てを対象として分析を行った。

なお、レポートの中の（n= 数字）はその項目の有効回答数である。また、中央値などの専門用語については、巻末の専門用語解説一覧を参照いただきたい。

問１．あなたの年齢をお教えください（n=147）

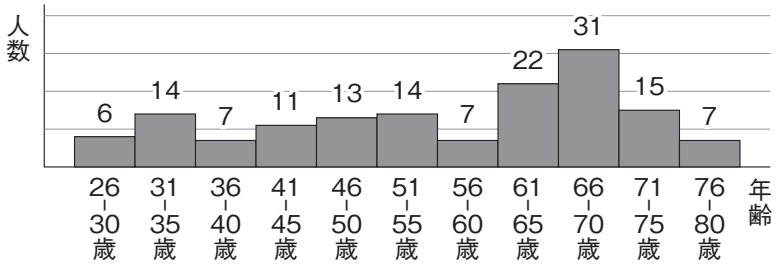

図１　修了者の年齢

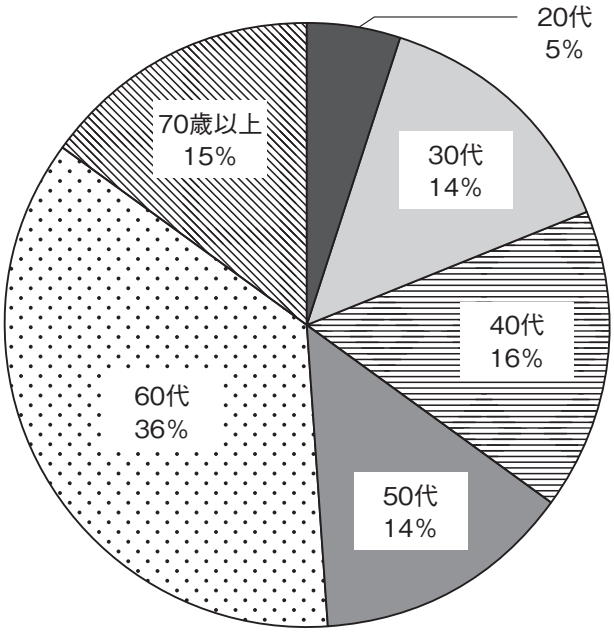

図２　修了者の年代

➡回答者の平均年齢は55.9歳であり、中央値が61歳であった。最年少が27歳であり、最高齢が80歳であった。また、最も多い年代は、60代であり、この傾向は本書の教区への調査や全国集会参加者への調査結果と同じ結果であった。

一方で、このアンケートへの回答は、比較的若年層からの回答が多く、50代以下が全体の約半数であった。研修会には龍谷大学大学院生の参加も一定数あることから、20代の回答も見られた。若い世代が多くビハーラ活動者養成研修を受けており、今後のビハーラ活動推進のためには若年層の活躍が期待されていることから、この研修会が非常に重要な役割があることが改めてわかる。

問２．あなたの性別を教えてください（n=148）

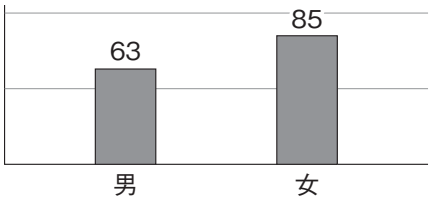

図３　修了者の性別

➡男性の回答が63人で、全体の43% であり、女性の回答が85人で、全体の57% であった。他の調査結果と同様に、女性の活動者が多い傾向であった。

問３．あなたの所属を教えてください（n=150）

表１　修了者の所属

教区	人数	教区	人数	教区	人数
北海道	7	東海	4	山口	10
東北	2	滋賀	5	北豊	2
東京	7	京都	7	福岡	6
長野	6	奈良	6	大分	2
国府	0	大阪	17	佐賀	2
新潟	1	和歌山	3	長崎	2
富山	3	兵庫	13	熊本	3
高岡	2	山陰	9	宮崎	3
石川	5	四州	1	鹿児島	3
福井	2	備後	3	沖縄	0
岐阜	6	安芸	8		

➡それぞれの教区の平均回答者数は4.7人であり、中央値は３人であった。最小の人数は０人であり、最大の人数は17人であった。

これは2008（平成20）年～2016（平成28）年の養成研修会修了者への調査であり、この調査への返信があったことそのものが、ビハーラへの関与意識の高さを示しているともいえる。この結果から、継続してビハーラ養成研修会をうまく活用している教区もあれば、人材を探すことが難しい教区もあることがうかがえる。教団内や教区内における広報、また、教区内の他組織との連携を進めることによって人材を集めることが必要であると考えられる。

また、活動そのものを活性化させるためには、連区ごとのビハーラ活動推進事業を活用することで、新しい活動者が活動者のネットワークと接触することが可能となり、結果的にサポートと協力体制を強化することにつながる可能性があると考える。

問４．あなたは下記のどの区分に入りますか（一つだけ◯）（n=149）

僧侶・寺族・門徒・その他　※但し、寺族のうち僧籍のある方は、僧侶に記入してください

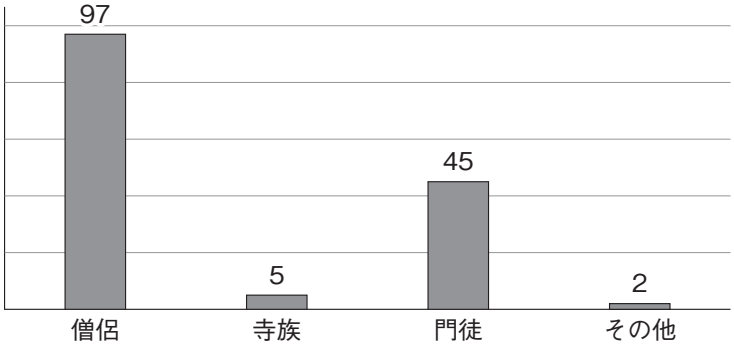

図４　修了者の区分

➡この結果から、僧侶は97名で全体の65% であり、門徒は45名で全体の30% であった。他の調査結果と比べても、門徒が参加している割合が低いことから、門徒が養成研修会へ参加しづらい可能性、またはビハーラ活動を始めようとする門徒が減っている可能性、門徒の活動のモチベーションが下がっている可能性などが考えられる。

ビハーラ活動を展開する中で、「いつでも誰でもビハーラ活動」と言われていた時代もあったように、僧侶と門徒が共に推進していく活動がビハーラ活動であるが、一方で、ビハーラ僧の養成など、より専門的な知識を身に着けた人材の養成も注目されている。また、活動そのものも多様化しているため、どのように僧侶や門徒が参画していくのかが見えにくい現状である。これらはそれぞれの時代背景の中で、悩みを持った様々な人の苦しみに寄り添う活動を続けているビハーラ活動であるからこその多様性であるが、それぞれの領域の活動内容や活動指針を整理することで、より多くの人に伝わりやすく、実践しやすくなるための理論化や工夫が必要であると考える。

このことから、意識のある僧侶や門徒が、ビハーラ活動へ参加するための広報や説明の工夫を行っていくことが今後の課題と考える。

問５．現在、具体的にビハーラ活動をしていますか（一つだけ◯）（n=146）

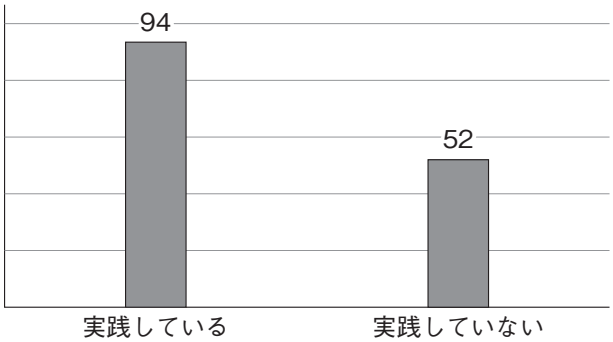

図５　実践の有無

➡「実践している」と回答した人は94人であり、全体の64% であった。一方で、「特に実践していない」と回答した人は52人であり、全体の36% であった。

この結果は、ビハーラ活動者養成研修会に参加する人が、これからの活動を見越して研修会を受講しているのであれば、実践現場に繋げられていないことが課題の一つとして考えられる。

これについては、問15でその理由が詳述されているが、先に少し引用すると、「１．仕事の事情」「２．家庭の事情」「３．活動環境要因」「４．活動者自身の要因」の４つが実践できていない理由となっている。１や２のような事情がある場合は活動への参画が困難であることがうかがえるが、３や４のような、活動場所や実践機会、活動仲間がいないという理由、活動に対する不安、活動グループ内での自信のなさなどについては、宗派や教区そして教区ビハーラが連携して対応していくことで改善できると考える。

問５で「１．実践している」と答えた人は、以下の問いにお答えください。
「２．特に実践していない」と答えた人は、問15からお答えください。

問６．ビハーラ活動のご経験は何年になりますか（主なものを一つだけ○）（n=89）

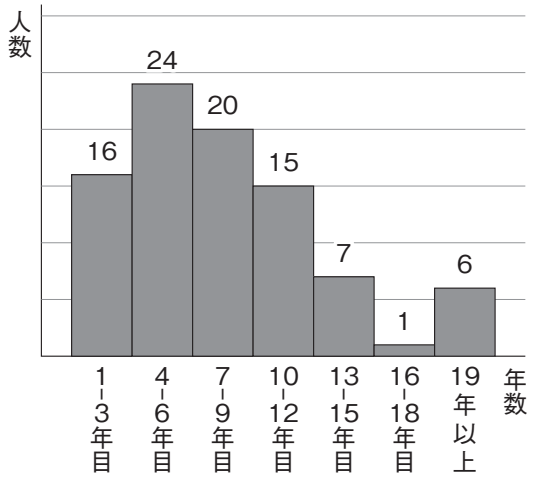

図６　経験年数

➡「本調査は、2008（平成20）年～2016（平成28）年の養成研修会修了者への調査であるが、調査が2018（平成30）年時点であるため、４～６年が最も多い結果となっていると考える。このことから、基本的には活動年数が増えるほど活動者が減っていくことがうかがえる。

また、問15にあるように、実践していない理由は様々で、活動者が減っているのは当然のことでもある。むしろビハーラ活動そのものが収益性のない活動であることが多く、ボランティアに近い活動形態であることから、継続が困難な側面があると考える。そのことからも、ビハーラ活動を行う中心的なメンバーが、結果的に19年以上継続して実践していることが現在の基本的な活動形態であり、そこに新規参加者が10年程度継続している活動といえる。

このことから、現状のデータとして活動者の高齢化が進んでいることを考えると、中心的なメンバーが代替わりすることも課題であり、そのことをいかに自然に円滑に進められるか

が、ビハーラ活動全体の活性化につながると考える。モデルの一つとしては、10年を超えて活動を続けてきた者が、それぞれのビハーラ活動の中心的な役割を担うように代替わりを行い、そこに新規参加者が集まる状態を作っていくプロセスが考えられる。

問７．現在、ビハーラ活動をされている目的は何ですか（主なものを一つだけ○）（n=83）

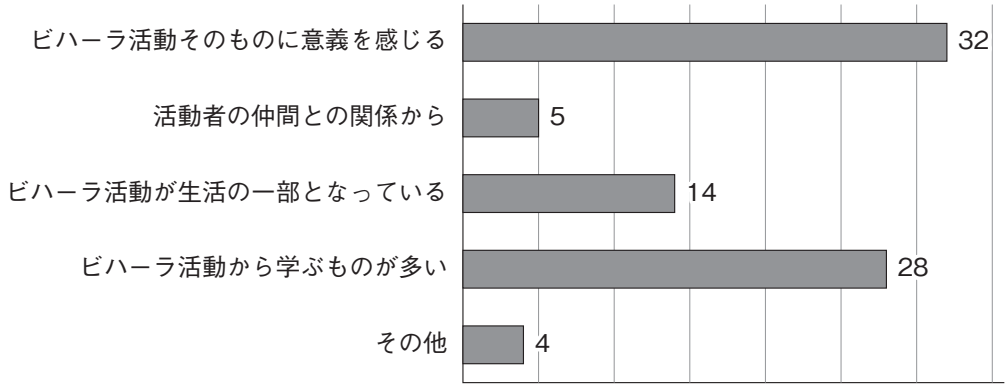

図７　活動の目的

➡「ビハーラ活動そのものに意義を感じる」との回答が32人で全体の39% であり、「ビハーラ活動から学ぶものが多い」との回答が28人で全体の34% であった。また、「ビハーラ活動が生活の一部となっている」との回答が14人で全体の17% であり、このことから、ビハーラ活動そのものが目的となっていることがわかった。

また、この結果は、全国集会のアンケートとも同様であった。

問８．あなたはビハーラ活動をどこで実践していますか（該当箇所に○）
「その他」で実践している方は、具体的な内容を以下にご記入ください（n=87）

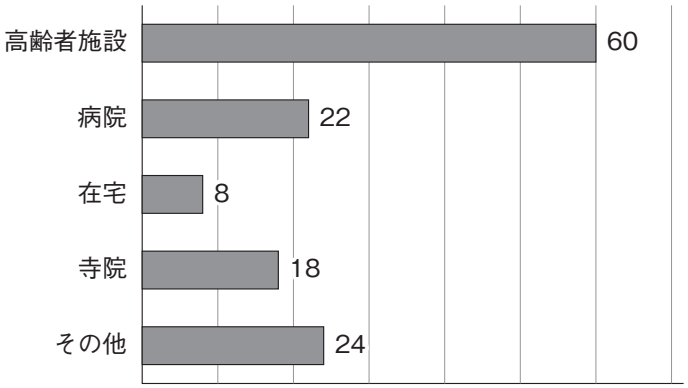

図８　実践場所

（図の中は延べ人数）

➡高齢者施設で活動しているという回答が、60人で全体の69% であり、病院で活動しているが22人で全体の25%、寺院で活動しているが18人で全体の21% であった。また、この結果は、全国集会のアンケートとも同様であった。

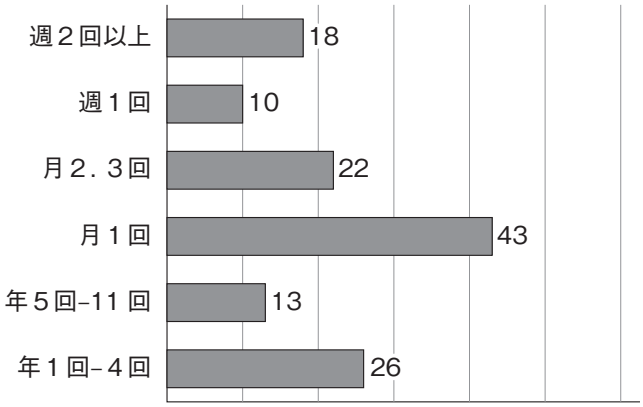

図９　活動頻度

（図の中は延べ人数）

➡グラフの基本的な形としては、最も多い事項を中心に、凸形となる分布が一般的であるが、このグラフを見る限り、「月１回」が最も多い典型例となっている。

一方で、「週２回以上」と、「年１回～４回」が多く、このことから、ビハーラ活動の実践回数は３種類に分類できると考える。

まず、活動頻度が最も多いのは、月１回の43人との回答で、全体の49% であり、これが、ビハーラ活動の基本形態であるといえる。

次に多かったのが、月２～３回以上の回答であり、まとめると50名となり全体の57% であった。この回答者は積極的に施設訪問を行なっている活動者であるといえる。

そして、月１回未満の回答であり、まとめると39人となりの全体の45% であった。これは、施設に応じて、季節やイベントごとに訪問している活動者であるといえる。

表２　活動場所における活動頻度

活動頻度	高齢者施設の人数	病院の人数	在宅の人数	寺院の人数	その他の人数	計
週２回以上	5	7	1	2	3	18
週１回	3	2	1	1	3	10
月２．３回	13	3	0	2	4	22
月１回	23	3	3	6	8	43
年５回-11回	4	1	2	3	3	13
年１回-４回	12	6	1	4	3	26
合計	60	22	8	18	24	132

（表の中は延べ人数）

➡活動頻度が最も多いのは、「高齢者施設にて月１回」、次いで、「高齢者施設にて月２．３回」であり、ビハーラ活動の基本的な活動を示していると言える。３番目に多いのは、「高齢者施設にて年１回－４回」であり、季節ごとやイベントでの関わりを示していると考える。ついで、その他を除けば、４番目に多いのが「病院にて週２回以上」の活動であり、ここに注目したい。

週１回以上活動しているとの回答が28人あり、そのうち９人の32% が病院にて活動しており、８人の29% が高齢者施設での実践者であった。全体の割合では、病院の活動者は22

人で17%、高齢者施設での活動者の割合は60人で45% であることから、相対的には、活動頻度が多い人ほど、病院で活動する割合が増えていることがわかる。

病院での活動頻度の全体と合わせて考察するならば、毎週、病院へ足を運び、積極的に活動している者と、季節ごとに開催されるイベントなどを目的として病院へ訪問されている者の２つの活動形態がうかがえる。

➡問８の「その他」と回答した活動は、大きく７つに分けることができた。
アンケート結果そのものを「　」で示す。

1．〔福祉施設訪問〕
2．〔地域ボランティア実践〕
3．〔訪問活動〕
4．〔患者・高齢者とその家族に対する関わり〕
5．〔SNS や電話相談〕
6．〔定例会・勉強会〕
7．〔日々の生活や活動全般〕

1．〔福祉施設訪問〕に関するビハーラ活動として、「乳児院訪問」「障がい者支援施設」「養護施設」など、社会福祉施設において活動している旨の回答があった。
2．〔地域ボランティア実践〕に関するビハーラ活動として、「子ども食堂」「サロンや地域のボランティアグループ」「依頼を受けて地域の公民館で実践をしている」などの回答があった。
3．〔訪問活動〕に関するビハーラ活動として、「仮設住宅への訪問」「一人住まい、病気療養の方の在宅訪問」「民生委員として主に高齢者宅を訪問している」などの回答があった。
4．〔患者・高齢者とその家族に対する関わり〕に関するビハーラ活動として、「認知症の人と家族会の介護者の悩み、苦しみを20年間、共に勉強させてもらっています」「介護家族の会に参加し、傾聴や介護全般についての学習会に参加している」「がん患者の末期に携わり、亡くなった後の不安や家族への傾聴をしている」などの回答があった。
5．〔SNS や電話相談〕に関するビハーラ活動として、「こころの電話」「インターネット上のライブ放送で、雑談やお悩み等の相談を受ける時間枠を設けることがあります」などの回答があった。
6．〔定例会・勉強会〕に関するビハーラ活動として、「学習会を年６回開催している」「ビハーラ会員の集い」「別院での定例、語り合い聞きあう会」などの回答があった。
7．〔日々の生活や活動全般〕に関するビハーラ活動として、「月参りなどの日常法務自体がビハーラ活動だと考えている」「日々の暮らしの中」「自分の家族に対する介護・成年後見人活動」などの回答があった。

これらのことから、ビハーラ活動が、より様々な形で展開していることがわかる。

問９．あなたはどのような活動をしていますか（複数回答可）（n=95）

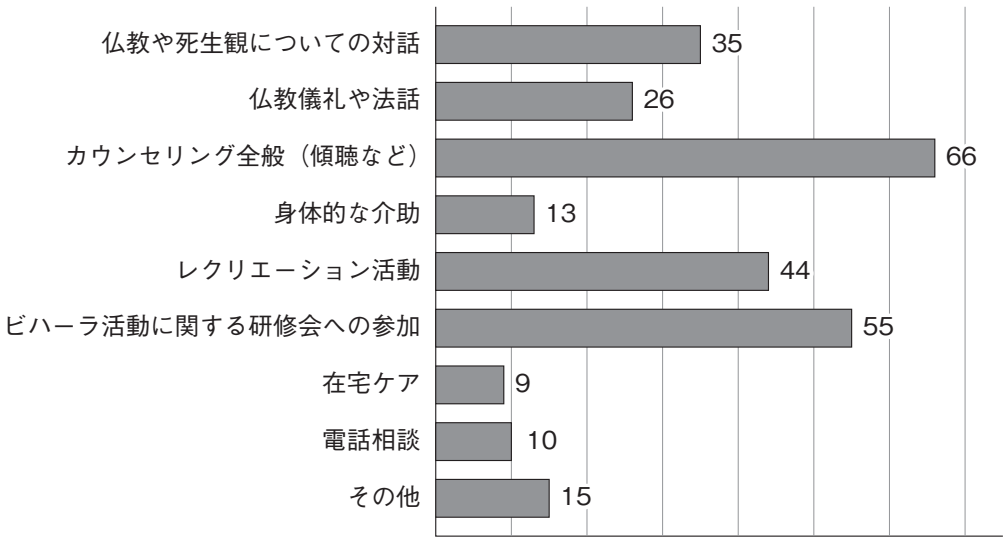

図10　活動内容

➡養成研修会を修了した方のうち、実践している回答の中では、「カウンセリング全般」が66人の回答があり全体の69% であった。次いで「レクリエーション活動」が44人で全体の46%であり「仏教儀礼や法話」が35人で全体の37%、「仏教や死生観についての対話」が26人で全体の27% であった。

このようにコミュニケーションに関わる活動が多く、そしてレクリエーション活動、仏教儀礼や法話の３つが、中心的な活動であると考える。

これは全国集会のアンケートと同様の結果であるが、養成研修会参加者はより「カウンセリング全般」や「仏教や死生観についての対話」の実践を進めているといえ、研修の成果の一つと考える。

問10．あなたがビハーラ活動の実践現場で困ること、不安に感じることは何ですか（箇条書）

➡この結果は、大きく４つに分けることができた。

以下、アンケート結果そのものを「　」で示す。

1.〔ビハーラ活動者グループの問題〕
　（ア）活動者の高齢化と減少　　（イ）活動者内での齟齬
　（ウ）活動そのものの停滞感
2.〔対話における難しさ〕
　（ア）傾聴の難しさ　　（イ）傾聴に対して話すことの難しさ
　（ウ）宗教的な会話の難しさ　　（エ）活動そのものに対する不安
3.〔施設との関係の難しさ〕
　（ア）施設職員との関係構築の難しさ　　（イ）施設における宗教性の出しにくさ
4.〔外部的な阻害要因〕
　（ア）実質的な距離の難しさ　　（イ）法務が忙しい
　（ウ）僧侶へのステレオタイプ　　（エ）活動者以外からの不理解

1．〔ビハーラ活動者グループの問題〕については、活動者が高齢化や、活動者が増えないことが問題であるという回答があった。また、活動をしようと思うが、周りに仲間がいないため、活動するのが難しいと言う回答もあった。

また、ビハーラ活動者内での齟齬として、「ビハーラ活動の意義についてメンバー間や、活動場所によっても違いがあり、共通認識が持てない」と言う回答があった。現場によって、活動そのものが制約を受けるため、どのような認識になるのかについては齟齬があるのが当然であるが、それぞれの整理がされていないのが現状である。高齢者施設か、緩和ケア病棟か、寺院か、それぞれの現場による違いと共通点を検討していくことが課題であると考えられる。

そして、活動の停滞感として、「活動のマンネリ感」や、「単なるボランティア」になってしまっていると言う回答もあることから、ビハーラ活動の独自性について考え直すことが必要であると考えられる。

2．〔対話における難しさ〕については、傾聴の難しさがあげられており、自分の活動が相手にしっかりと寄り添えているのかどうか、ということに対する不安があげられていた。また、傾聴活動をすることによって、言葉として応える機会もあり、どのように話したらいいのか難しいという回答もあった。具体的には、宗教的な問いに対して、どのように伝えるのか、またそのことが教義との整合性があるのか不安に思うとの声があった。これらのことを総合して、「自分の活動が本当に役に立っているのだろうか」と言う回答もあり、活動者自身が不安に思っていることが示唆された。

これらの問題は、活動者の対話における不安が大きく関与しているため、スーパービジョンの環境を整備するなどの対策が必要であると考える。しかしながら、スーパービジョンは非常に高度な実践であり、どのようにそのシステムを作るのかが大きな課題であると考えられる。

3．〔施設との関係の難しさ〕については、施設職員との関係構築の難しさがあり、「どこまで踏み込めるのか、踏み込んでいいのか、介護職員さんとの領域侵犯（感情的な部分で）」との回答があった。また、「受け入れ側が本音でどのように感じているのか、よく思ってくれているのか、迷惑になっているのではないか」など、活動者が自身の活動に対して自信を持てていないことが想像される。

さらには、施設において、宗教性が出しにくいと言う問題があり、「ビハーラがどんな意味なのか内容を知ってもらってない施設もあり（中略）、以前のように真宗の教えとか、傾聴活動が難しくなっている」、また、「特養で傾聴ボランティアの時、西本願寺のビハーラのコマーシャルを前面に出さずにやってほしいと言われる」などの回答があった。

活動者が、施設職員との連携ができていない状態であれば、活動者の活動意欲も維持しにくいと考えられる。施設側がどのようなニーズを持ち、それに応えようとする部分と、ビハーラ活動者として実践したい部分をどのように位置付けるのかが、各活動グループの課題だと考えられる。

4．〔外部的な阻害要因〕については、様々に見られたが、活動場所が遠いといった距離的な問題もあれば、僧侶として法務が忙しいとの回答もあった。また、「僧侶」そのものに対する偏見があり、それを払拭していくことも課題であるとの回答もあった。また、ビハーラ活動者以外の僧侶や関係者が、活動の理解を得られてないように感じるとの声もあり、それぞれの活動者が継続的に実践できるために、実質的な難しさがあることがわかった。また、ビハーラ活動者以外の僧侶や関係者、その他の宗教家からのビハーラ活動の不理解も示唆された。ビハーラ活動を実践する意義を、宗門全体として考え、示していく必要があると考えられる。

問11. 現在のビハーラ活動で、ビハーラ活動者養成研修会の研修カリキュラムの中で　特に役に立っていると思う項目を一つ選んでください（主なものを一つだけ◯）（n=73）

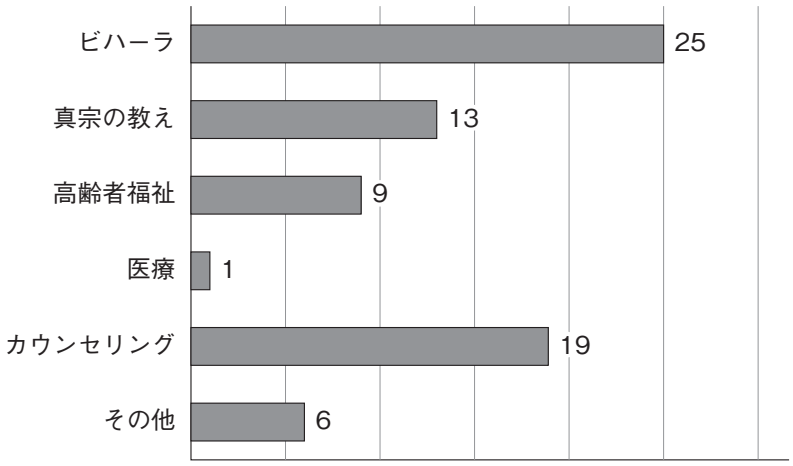

図11　役立ったカリキュラム

➡研修カリキュラムの中で特に役に立っていると思う項目について最も多かったのが、「ビハーラ」との回答が25人となり全体の34% であった。ビハーラが何であるのかを問い、深めることが活動者にとって意義があったものと考える。次いで、「カウンセリング」と19人の回答があり、全体の26% であった。

問12. ビハーラ活動者養成研修会の研修カリキュラムに必要な項目は何だと思いますか。ご自由にお書きください

➡この結果は大きく５つに分けることができた。

1．〔実践的なカリキュラム〕
（ア）実践的な方法論や技術の獲得　（イ）実践・実習　（ウ）施設訪問

2．〔関連領域に関する知識やスキル〕
（ア）疾患特性の理解　（イ）カウンセリング　（ウ）関連法規や倫理
（エ）高齢者支援についての知識や実践　（オ）他職種との連携

3．〔ビハーラ活動を深めるようなカリキュラム〕
（ア）真宗の教え　（イ）ビハーラ活動の報告会　（ウ）事例研究・検討会

4．〔支援者として必要なスキルの獲得〕
（ア）コミュニケーション・スキル　（イ）傾聴
5．〔現状のカリキュラムに満足している〕

1．〔実践的なカリキュラム〕は、実践活動に結びつくようなロールプレイングを希望する回答や真宗の人間観に基づいた具体的な実践方法について学びたいという回答があった。また、実践・実習として「実践させていただける場がもっと欲しい」「病気・認知症以外の例えば社会的弱者に対してのケアについての実践実習をしてほしい」などの回答があった。

また、施設訪問として、入所者の生活を知ることや施設の中のビハーラ活動実践者の実際の活動について知りたい等の声が挙げられた。これはビハーラ活動の活動領域が多岐に渡っていることで、それぞれの現場に近い領域での実践・実習が求められており、参加者のニーズに対応できるように、可能な範囲で実習の充実を検討する必要があると考えられる。

2．〔関連領域に関する知識やスキル〕は、統合失調症や認知症についての知識などの疾患特性についての知識、社会福祉制度や倫理についての知識が得られるようなカリキュラムを希望する回答があった。また、「カウンセリングのスキルアップ」を必要とする回答や「高齢者の心理」や「実際の現場や介護の現状」について知りたいとの回答もあった。また、他職種との連携については「医療従事者との対話」や「在宅往診をしている人とのかかわり」などについても学びたいとの回答もあった。

これらのことから、ビハーラ活動を行ううえで必要な実践的な方法としてカウンセリングを中心として、相手の理解と援助、連携について学ぶことの必要性が認識されていることがうかがえる。また、精神疾患や関連法規についての理解を深めることが必要であると認識されているのではないかと考えられる。

3．〔ビハーラ活動を深めるカリキュラム〕は、真宗の教えをより深く学びたいという回答があった。また、「地域の実情にあった活動の報告・実践方法を学べたらよい」や「各地で実際に行われている活動を学習するカリキュラム」「事例の発表やその対応の方法」「より多くの実践例を聞き、自分ができることを見つけ出せる」などの回答があった。

これらについては、真宗の教えに基づいた実践を行ううえで、実際のケースで起きていることや対応方法についての困難さを感じており、ビハーラ活動をより具体的にイメージするための方法として、事例検討や活動報告が求められているのではないかと考えられる。

4．〔支援者として必要なスキルの獲得〕は、「コミュニケーションのスキル向上（対ケア対象者、対スタッフ）」「僧侶として、またはビハーラ活動者として言っておくべき最低限のマナー、作法、注意事項、立ち居振る舞い」などが必要との回答があった。また、ビハーラ活動者として欠かせない傾聴に関するカリキュラムを充実してほしいなどの回答もあった。

5．〔現状のカリキュラムに満足している〕については、「現在のカリキュラムは全部大切

だった」「必要な項目は網羅されていると思う」などの回答があった。

また、「現状のままで良い。長時間椅子に座って缶詰め状態の日が多かったので、時間割の組みなおしを希望します」という声もあり、カリキュラムについては満足しているが、日程の変更を希望する回答もあった。

問13. ビハーラ活動者養成研修会でどのような学びを得ましたか（自由記述）

➡この結果は大きく３つに分けることができた。

1．〔ビハーラについて〕
　（ア）ビハーラの基礎　　（イ）真宗の教え
　（ウ）僧侶としての姿勢　　（エ）死生観の再考

2．〔カリキュラムを通した学び〕
　（ア）スキルの獲得　　（イ）知識の獲得　　（ウ）仲間との繋がり

3．〔援助者としての基本的姿勢〕
　（ア）受容的態度　　（イ）寄り添うということ　　（ウ）傾聴の姿勢

1．〔ビハーラについて〕は、ビハーラの基礎に関わるような、「浄土真宗におけるビハーラ活動の意義」や、「ビハーラに対する考え方が多様であること」などの回答があった。また、真宗の教えについては「真宗の教えと実践の関係性」など、教義により踏み込んだ学びがあったとの回答も見られた。次に、僧侶としての姿勢としては、「今まで僧侶でありながら苦しみを実感していなかったと言うこと」「現代におけるお寺の役割や僧侶としてどのようなことができるかと言う課題を突きつけられた」など、僧侶として、いかに実践していくのかを自覚したと回答があった。死生観の再考としては、「命について学んだように思います。死んでいく姿とか、ただむなしい死ではなく、この世を全うし、お浄土に生まれることへの安心の心とか」「自分自身も苦を抱え、生老病死を支えられながら生きていると言うこと」などの回答があった。

2．〔カリキュラムを通した学び〕については、スキルの獲得として、「自分の宗教の教えや、価値観を押し付けない」などの回答があった。知識の獲得として、「老人福祉の現状と理解等」「医療分野、スピリチュアルな分野が勉強になった」などの回答があった。仲間との繋がりとして、「仲間を得たことは何よりありがたい」「講師の先輩方々がいることを知れたこと」などの回答があった。

3．〔援助者としての基本的姿勢〕として、受容的態度として、「やってあげるじゃなく、させてもらっているということ」「待つこと」などの回答があった。寄り添うということとしては、「理解することができないということをふまえて寄り添うこと」「聞くことの難しさ」などの回答があった。また、傾聴の姿勢として、「カウンセリングについて、傾聴の基本のあり方」「傾聴の大切さ。学んでいなければ話を途中でやめていたと思う」などの回答があった。

問14. あなたがビハーラ活動を実践する中でやりがい・充実感を感じるのはどのような時ですか（自由記述）

➡この結果は、大きく５つにわけることができた。

1．〔利用者の反応〕
（ア）利用者の笑顔　（イ）利用者の表情　（ウ）感謝の言葉

2．〔利用者との関わり〕
（ア）利用者の変化　（イ）利用者に変化を与えることができた時
（ウ）利用者が活動に参加してくれた時　（エ）相手の悩みに触れた時

3．〔ビハーラ活動そのもの〕
（ア）ビハーラ活動を通した学び　（イ）仏教についての活動ができたとき
（ウ）利用者との関わりを通してお念仏を喜ぶ

4.〔スタッフへのサポート〕

5.〔やりがいの実感なし〕

1．〔利用者の反応〕について、利用者の笑顔では、「暗い顔が和やかな顔に変わった時」や「訪問した時、笑顔で迎えてくださる時。待っていて下さっていると感じた時」「同じ課題でともに笑いあえた時、よかったと思う」といった回答があった。

また、利用者の表情では、「ビハーラ活動を通して関わった方の表情に変化があった時」や「施設入居者の方々の笑顔、泣き顔、怒った顔など様々な表情を見せてくださること」といった回答があった。

感謝の言葉では、「高齢者施設での利用者の皆様からありがとう、また来てねという言葉をいただくと時」や「患者さん、電話相談の方から「話を聞いて下さり、ありがとうございました」と言われた時といった回答があった。

そのため、利用者の方からの笑顔や感謝の言葉といった反応をもらった時にやりがいや充実感を感じていると考えられる。

2．〔利用者との関わり〕について、利用者の変化では、「現在、進行しているカウンセリングで少しずつ前向きに進んでいることを実感した時」や「死に対して、死を考えるとしょぼくれていくのではなく、希望をもってエネルギーが高まるような死生観を持ってくださる時」といった回答があった。

利用者に変化を与えることができた時では、「介護者に対する否・嫌感の解決ができた時」や「少しでも役立ったかもしれないと感じた瞬間」「声をかけさせていただくことで、笑顔になり話を自分からしてくださるようになった時」といった回答があった。

利用者が活動に参加してくれた時では、「老人施設に寄せていただくことがほとんどなので歌やレクリエーションで喜んでもらえると嬉しい」や「話し合えた時やスキンシップ」「リズム体操をしたり、声を出して会話、歌などに参加していただいたとき」といった回答あった。

相手の悩みに触れた時では、「目の前にいる方のこれまでの人生やこれからのこと、生死に関することなどについて触れることができた時」や「身近の知らない世界を聴か

せてもらう時、「心を開いてくださる時。世間話の何気ない話からだんだん打ち解けていくうちに相手から本音のところを口に出してくださった時」といった回答があった。

それらのことから、利用者との関わりを通して利用者の方に変化が生じたり、活動者の活動に利用者の方が参加してくれたりといった、活動を通した利用者との関わりからやりがいや充実感を感じていることが考えられる。

3．〔ビハーラ活動そのもの〕について、ビハーラ活動を通した学びでは、「クライエントやビハーラ活動から学ぶことができている時」や「仲間とのミーティングで互いに共有する、会話する中で充実感を感じる」といった回答があった。

仏教についての活動ができたときでは、「法話を熱心に聞いてくださる時」や「相手に僧侶として認識された時」「入所の高齢者の皆様とのこころの交流が図れたと思う時です。それは主に、傾聴活動と同時に真宗のご法義などをお話しした時などです。相手の思いを聞く、これは最も大切なことであります。一方で、その思いを吐き出された後にお相手の方のこころにご法義を分かりやすくお取次ぎさせていただく、そのタイミングが図れた時ほど充実感を感じることはないです」といった回答があった。

利用者との関わりを通してお念仏を喜ぶでは、「自分自身が相手とのかかわりから、お念仏をよろこぶ人生をいただけるということ」や「高齢者、病気の人など、他人事ではない、いつかいずれ自分もそうなることを考え、皆様に接することは自分のこころの勉強になり、つたない力ですが仏様のお手伝いをさせてもらうことの自分の境遇に感謝感謝です」といった回答があった。

4．〔スタッフへのサポート〕については、「ビハーラ活動をする若いスタッフのサポートをすることにやりがいを感じます」という回答があった。

5．〔やりがいの実感なし〕については、「正直なところ、充実感というものを感じたことはない。いつもこれでよかったのかと反省することに終始しているように思われる」や「なかなか回数を参加できていないのでやりがいなどはまだまだです」、「やりがい、充実感はあまり感じません」といった回答があった。

「問15」は、現在、ビハーラ活動を行っていない方がお答えください。

問15. 現在、ビハーラ活動を実践していない理由は何故ですか。自由にお書きください

➡この結果は、大きく４つにわけることができた。

1．〔仕事の事情〕

（ア）寺院活動による時間的余裕　（イ）寺院活動以外による時間的余裕　（ウ）職種上の都合

2．〔家庭の事情〕

（ア）家族の介護　（イ）子育て育児　（ウ）活動者自身の体調　（エ）経済的理由

3．〔活動環境要因〕

（ア）活動場所の不足　（イ）実践機会の不足　（ウ）活動仲間の不足

4．〔活動者自身の要因〕

（ア）活動を行うための技量に対する不安　（イ）活動に対する認識の齟齬

1．〔仕事の事情〕について、寺院活動による時間的余裕では、「日常の法務および布教などで時間がないから」や「自坊の運営・護持で一杯一杯の状態であるため」「普段の法務などのため、月忌参りなどの門徒さんたちとの関わりの中でのビハーラの実践も、まだまだ不十分ではないかと感じています。ですので、プラスαでの活動になかなか積極的に慣れていないのが現状です」といった回答があった。

寺院活動以外による時間的余裕では、「仕事や他のボランティア活動などで時間的余裕がないこともあって、ビハーラ活動を受け入れていただける施設等を開拓するなどの取り組みができていないのが実情です」や「会社を退職して法務のみを行い、今後もその生活が続くと思っていましたが、再度就職して自由な時間が無くなったため」「寺院関係以外の仕事に従事しており、ビハーラ活動をする時間的余裕が持てない」といった回答があった。

職種上の都合では、「主に介護支援専門員（ケアマネージャー）の仕事をしており専門職としての立場上、仏教福祉を前に出すことが困難であります」や「直接宗教的な関りをもつ機会が仕事上難しいが、心の中に持つのは安らぎとして相対する場面が多い」といった回答があった。

2．〔家庭の事情〕について、家族の介護では、「両親の介護などでなかなか時間が取れない」や「家族の介護などが必要になり、まず身内に対してのビハーラ活動が必要と思いました」といった回答があった。

子育て育児では、「現在、子育てをしているので活動が難しい」や「結婚、出産、子育てがあって今しばらくは研修参加などの時間が取れない」「休職中だった娘が仕事復帰押して孫の面倒をみる必要になったから」といった回答があった。

活動者自身の体調では、「自身の体調がすぐれず、受講後入院も２度経験しました。外へ出ていく活動は難しいが、門徒の方々の中で接する折、ビハーラ活動といえる活動を心掛けている」や「年齢的に足・腰が不自由となった頃（５年位前）活動をやめました」といった回答があった。

経済的理由では、「ビハーラでは食べていけないので、ヘルパー資格を取得し、某ステーションで実務３年過ぎました」といった回答があった。

ビハーラ活動を行う実践者自身も高齢となり、その家族の介護などから活動をしたくても難しい現状が考えられる。また、子育て中の方が活動をする時間が取れないなどの理由で、活動者の年齢層が絞られることも考えられる。そして、寺院活動等で時間的余裕がないといったケースも考えられた。

3．〔活動環境要因〕について、活動場所の不足では、「一番やりたかったことだが、受け入れ施設がない」や「ビハーラの施設での活動は交通の便が不便で参加しにくく、身近なところでしか活動できていない」「近くに活動受入の場所が見つからないことが実践しにくい理由です」といった回答がみられた。

実践機会の不足では、「実践する機会がないため」や「ビハーラ活動を行う機会がない」「今は地元を離れ生活しています」といった回答がみられた。

活動仲間の不足では、「身近に統率者がいない」や「周りにもビハーラとし取り組んでおられる寺院もおられず何かやっていければという思いはあるのですが…」「身近な地域にビハーラ活動を行っておられる方もいなく、一門徒が新しく施設での活動を始めるには私にはハードルが高くできていない状況です」といった回答があった。

そのような回答から、活動場所や実践する機会、実践していく仲間が不足している現状が推察されるため、個人でビハーラ活動を続けていくのには荷が重く、周囲のサポートが必要と考えられる。

4．〔活動者自身の要因〕について、活動を行うための技量に対する不安では、「研修終了後、自分に「寄り添うこと」「聴くこと」ができるのか、自信がなくなったから」や「現場へ伺った時、とても難しいと思い経験不足であることを実感いたしました。専業主婦のため、寺族の方や僧侶の方とは違い、相手からすると接しやすいが、また、実際のところは寺族の方々がなにかよいような感じでした。なかなか主婦にビハーラ活動は難しいと感じ遠のいています」といった回答があった。

活動に対する認識の齟齬では、「自分がイメージしていたことと教区ビハーラ活動の内容に違和感があった。ほとんどの会員が女性ばかりで居場所がない感じがした」や「活動は素晴らしいものですが、数年前の研修で自分自身にはあっていないとも感じました」といった回答があった。

そのようなことから、活動者自身が自信をもって取り組むことが難しい状況にあるため、活動者に対するバックアップ体制を行っていくことが必要と考える。

問16. その他、ビハーラ活動全般について、ご意見・ご要望などあれば自由にご記入ください

➡この結果は、大きく４つにわけることができた。

1．〔研修に対するコメント〕
（ア）研修日や内容　（イ）研修の意義　（ウ）研修対象者の整理

2．〔ビハーラ活動〕
（ア）対外広報活動　（イ）対内広報活動　（ウ）ビハーラ活動の意義
（エ）活動のすみ分け　（オ）経済性

3．〔ビハーラ活動の実践〕
（ア）学びの機会　（イ）活動の場　（ウ）地区での活動支援
（エ）活動や研修の情報提供　（オ）活動仲間　（カ）活動報告

4．〔その他〕
（ア）感想　（イ）意見

1．〔研修に対するコメント〕について、研修日や内容では、「研修が平日に多く、夜や休日に設けてもらうと参加しやすいです」や「個人的にはもう少し仏様のお話があるといいなと思います」「臨床仏教講座をやっていただければ幸いです」といった回答があった。

研修の意義では、「このアンケートを記入するにあたって養成研修会を受講した時の教

材を読み返してみました。改めてよい学びだったと気がつきます」といった回答があった。

研修対象者の整理では、「現在の養成講座の内容では、一般門徒の方は参加しづらく僧侶中心になりがちだと思います。ビハーラはこうあるべきということではなく、もう少し間口の広い視点で学びたいと思います」や「ビハーラ僧も門徒も差は関係ないとおっしゃられる。だが、それは僧侶側の言い分。立場が根本的に違うのですから」といった回答がみられた。

2．〔ビハーラ活動〕について、対外広報活動では、「今後益々大切かつニーズのある活動になってくると思いますので、教団としても大いに力をいれるべきだと考えます」や「大阪だけでも数多くの高齢者施設があります。個人の力よりは、担当部からのPRがもっと大切だと思っております。どんどん前に進めてください。内向きに思います」「SDGsと重ねた活動として行うことで、もっと一般的に受け入れてもらいやすくなるのでは…と感じています」といった回答があった。

対内広報活動では、「組や教区を見渡しても関心のある人は本当に少ない。全国大会を京都で開催しても、関心のある人しか行かない。地方開催することによって無関心層を掘り起こせないものか…」や「教区内で住職（僧侶）坊守、若院さん等の加入が少なく、ビハーラ活動が広がらないでいるのが現状です」といった回答があった。

ビハーラ活動の意義では、「ビハーラ活動とは、特別な活動ではなく、日常の中でいくらでも実践可能な活動だと思います。目の前に悩み苦しむものに寄り添う活動です」や「ビハーラ活動というと訪問などの何か具体的な活動だけをさしてしまうような気がしますが、日常でも十分生かせると思います。私はビハーラ研修での学びをきっかけに、得度、そしてSotto（京都自死・自殺相談センター）への学びへとつながりました。そういった意味ではビハーラは私の今後の活動のスタート地点になったと思っています」といった回答があった。

活動のすみ分けでは、「臨床宗教師とのすみ分けが気になります」や「ビハーラの学びの上で、現在も介護福祉士として意識していることに代わりありません。医療法人上、宗教色は出せません。自分の中で一家の大黒柱として収入を得ながら真宗の学びと活動をどのようにしていってよいのかずっと悩んでいます」といった回答がみられた。

経済性では、「このビハーラ活動が収入に結び付くようになればいいのだが、「葬式仏教」だけが収入では寂しい」といった回答がみられた。

そのようなことから、ビハーラ活動は特別なものではなく日常的なものとして、意義深いものと考えている人が多くいるが、そのことを対外的にも対内的にもあまり知られていないと活動者が感じている現状が推察される。そのため、対外対内に向けた広報活動や対話を行い、広くビハーラ活動を知ってもらうことが重要と考えられる。また、ビハーラ活動の意義は理解しているものの、それだけでは経済的なやりくりが難しく、活動意義と経済性とのバランスが重要である。その際、他の活動とのすみ分けも考慮する必要があると考えられた。

3．〔ビハーラ活動の実践〕について、学びの機会では、「中央研修や推薦する活動があれば

参加してみたい」や「せっかく全国にビハーラを通して仲間ができたが、それが今はほとんど関わりなし。継続的な講座、多角的な学びが必要」「受講後であったとしても、理解を深めるために何か別の研修機会があればと思います」といった回答があった。

活動の場では、「各教区のビハーラの行事に参加できるようにしていただきたいと思います」や「病院や高齢者施設にもっともっと僧侶や寺族が入っていけるような取り組みを期待しております」といった回答があった。

地区での活動支援では、「各地域にあるビハーラ活動支援機関の充実を要望いたします」や「地域でビハーラ活動の研修・学習の場の設立が望まれるが、経済的支援なく運営していく困難がある」といった回答があった。

活動や研修の情報提供では、「公開講座などに参加したいがホームページに書いてありますか」や「卒業生のフォローアップ研修会など、ホームページなどで図書の案内などしてくださると助かります」「自坊以外で実践活動できる場が少ない。特養以外でも子ども・若者の施設で実践活動がしたいので、紹介してほしい」といった回答があった。

活動仲間では、「仲間が欲しいです。１人では何もできません。まして、免許があるわけはないので僧侶ならそれなりの施設にでもお伺いできるでしょうが個人ではなかなかです」や「同窓会のようなともに研修をした方が今どのような活動を行っているのか知る機会があれば参加したい」「活動者の年齢が高齢者ばかりになっていて、後継者をいかに育てるかが今後の大きな問題となるのではないかと思っています」といった回答があった。

活動報告では、「情報収集を行っています。現在の会社勤めが終わりましたら、積極的にビハーラ活動に参加したいと思っています」や「僧侶という立場ではないのですが、講演させていただいています」といった活動状況を報告する回答があった。

このことから、ビハーラ活動を実践している者もいるが、活動場所や活動仲間が不足している現状がみられる。さらに、活動や研修場所などの情報不足もあり、活動の広がりを作りにくい現状が考えられる。そのため、研修後のサポート体制などについて、活動の組織化を図ることで活動者を支援していくシステム作りが必要と考えられる。

4．〔その他〕について、感想では、「皆様の意見の声により、益々の発展を望みます」や「活動をやめてもボランティア宗教的精神は常に持っているつもりです」「この年齢になってもできること…それは人に声をかけさせていただくこと、声をかけることで関りはできていく。ホスピスだけでなく、広く大きな捉え方でビハーラ活動の輪を広げたいですね。安穏になる世界を目指して」「定期的な活動は毎日の法務が忙しいため難しいのが現実です。また、民生児童委員としてサポートをしていく中で学んだことをいかせるよう心がけています。特別なビハーラ活動ということではなく、僧侶という存在はビハーラ活動が根底にあると思っている」といった回答があった。

また、意見では、「特に病院、施設などでの活動において法衣の着用にこだわる方がいらっしゃるようですが、あまり気にされない方がよいのでは。時としては、明らかに法衣が壁をつくる場合があると考えております。相手の方に合わせるべきでは」や「活動事例集があると参考になる」といった回答があった。

第26期 ビハーラ活動者養成研修会 募集要項

1．開催趣旨　医療、福祉、在宅において、病める人々やその家族に寄り添い、宗教者の果たすべき役割を探求し、相手の苦悩に共感し和らげることができるビハーラ活動者を養成する

2．研修内容

○ 基本学習会

A．導入（３時間）
B．真宗とビハーラ（13時間）
C．福祉とビハーラ（19.5時間）
D．医療とビハーラ（18時間）
E．カウンセリングとビハーラ（18時間）
F．まとめ（３時間）

○ 実　　習

ビハーラ活動を主体的に実践できる能力を習得するため、福祉・医療等の現場において実習を行う
・自主実習：１回（受講者近隣施設等にて自主実習を行う）
・実践学習：２回（１回目は特別養護老人ホーム「ビハーラ本願寺」にて実施）

3．研修期間　１年間［2016（平成28）年５月～2017（平成29）年３月］

4．募集人数　50名

5．応募資格
（１）浄土真宗本願寺派の僧侶・寺族・門徒であること
（２）１年間にわたり開催される基本学習会・実習に健康上問題なく出席できること。また、研修会に対して前向きに取り組めること
（３）研修会修了後、教区ビハーラに所属し活動できること
（４）上記の条件を満たすものの中より当該教区教務所長及び当該教区ビハーラ代表者が推薦する者
〈注意〉学習会欠席やレポートの未提出など、受講資格を取り消す場合もあります

6．提出書類
（１）ビハーラ活動者養成研修会受講願・履歴書
（２）レポート「応募の動機とビハーラ活動への思い」（600字以上800字以内）
上記書類完備のうえ、所属する寺院の承諾、教務所長及び教区ビハーラ代表者の推薦を得て、教務所を通じて社会部（社会事業担当）へ提出してください

7．受 講 料　４万円（各基本学習会開催時に分納）

8．経費負担
（１）研修中の宿泊費・食費は原則として宗派が負担
（２）基本学習会・実習出席にかかる往復の交通費〔鉄道グリーン料金（航空スーパーシート等も同様）を除く実費〕が３万円を超える場合は、超過分を宗派が負担

9．提出期限　2016（平成28）年４月28日（木）　必着《厳守》

10．採　　否　受講希望者に直接通知いたします

以　　上

ビハーラ活動者養成研修会カリキュラム（第22期～）

基本学習会	導入・真宗とビハーラ
	ビハーラ活動の基本視点 ビハーラ活動の意義 　真宗教義①「浄土真宗・仏教の基本的立場」 　真宗教義②「浄土真宗の人間理解」 　真宗教義③「浄土真宗のとらえる死と救い」 実践運動とビハーラ 寺院ビハーラ論①「浄土真宗における社会活動の意義」 寺院ビハーラ論②「寺院の社会的使命と活動報告」
	福祉とビハーラ
	福祉の基礎知識①「老人福祉の現状と理解」 福祉の基礎知識②「高齢者の心理」 福祉の基礎知識③「障害者福祉の現状と理解」 癒しの技法 生活リハビリ講座①「生活作り・関係作りの実際」 生活リハビリ講座②「遊びリテーションの実際」 ビハーラ活動の理解と実践①「実習オリエンテーション」 ビハーラ活動の理解と実践②「施設での法話・感話・スピーチ」 ビハーラ活動の理解と実践③「自主・実践学習（１回目）事後の考察」 ビハーラ活動の理解と実践④「実践学習（２回目）事後の考察」
	医療とビハーラ
	現代医療 医療と宗教 ソーシャルワーク 緩和医療①「医師の立場から」 緩和医療②「看護師の立場から」 医療における宗教家の役割「仏教」 スピリチュアルケアとグリーフケア①② 「患者の立場から」 在宅医療と地域医療
	カウンセリングとビハーラ・まとめ
	カウンセリング入門と実習①②③ ターミナルケアとグリーフケア ビハーラカウンセリング ビハーラカウンセリングのまとめ 研修の最後に思いを語る時間
実習	実践学習①（特別養護老人ホーム「ビハーラ本願寺」にて実施） 実践学習②（各教区協力施設にて実施） 自主実習①（受講者近隣施設等にて自主実習を行う）

ビハーラ活動者養成研修会について

	期間	研修内容 基本学習会 実習
第19期	2008（平成20）年５月～ 2009（平成21）年３月	真宗とビハーラ：16時間〈ビハーラ活動の基本視点〉　福祉とビハーラ：18時間　医療とビハーラ：19時間　カウンセリングとビハーラ：18時間　研修総括：３時間　計74時間
		実践学習：２回（内１回は特別養護老人ホーム「ビハーラ本願寺」にて実施
第20期	2009（平成21）年６月～ 2010（平成22）年３月	同上
第21期	2010（平成22）年６月～ 2011（平成23）年３月	同上
第22期	2012（平成24）年５月～ 2013（平成25）年３月	導入：３時間　真宗とビハーラ：13時間　福祉とビハーラ：19.5時間　医療とビハーラ：18時間　カウンセリングとビハーラ：18時間　まとめ：３時間　計74.5時間
		自主実習１回（受講者近隣施設等にて行う）　実践学習２回（１回は特別養護老人ホーム「ビハーラ本願寺」１回は教区協力施設にて実施）
第23期	2013（平成25）年５月～ 2014（平成26）年２月	同上
第24期	2014（平成26）年５月～ 2015（平成27）年３月	同上
第25期	2015（平成27）年５月～ 2016（平成28）年３月	同上
第26期	2016（平成28）年５月～ 2017（平成29）年３月	同上

ビハーラ活動者養成研修会　実習受入施設一覧

期／開催年度	教区	施設名	教区	施設名	教区	施設名
第19期 2008（平成20）年度	北海道	釧路北病院	東京	特養）あそか園	石川	特養）のとじま悠々ホーム
	奈良	特養）美吉野園	大阪	社福）慶徳会	兵庫	特養）宝塚まどか園
	山陰	特養）たんぽぽの里	安芸	特養）慈光園	佐賀	特養）桂寿苑
第20期 2009（平成21）年度	北海道	釧路北病院	東京	還る家ともに（善了寺）	東海	特養）陽光苑
	岐阜	特養）黒野あそか苑	奈良	特養）やまびこ	大阪	社福）慶徳会
	兵庫	特養）まどか園	安芸	特養）慈光園	宮崎	社福）橘デイサービスセンター
第21期 2010（平成22）年度	北海道	社福）さっぽろ慈啓会	東京	還る家ともに（善了寺）	富山	特養）白光苑
	滋賀	特養）能登川園	大阪	特養）ビハーラ	兵庫	特養）宝塚まどか園
	山陰	特養）たんぽぽの里	安芸	特養）ひうな荘	熊本	特養）バラ苑
第22期 2012（平成24）年度	北海道	釧路北病院	東京	特養）あそか園	富山	特養）白光苑
	奈良	特養）美吉野園	大阪	社福）慶徳会	大阪	特養）ビハーラ
	安芸	特養）慈光園	北豊	北九州サニーホーム		
第23期 2013（平成25）年度	北海道	釧路北病院	長野	老健）すめらぎ	岐阜	特養）黒野あそか苑
	福井	一乗ハイツ	大阪	社福）慶徳会	兵庫	特養）宝塚まどか園
	安芸	特養）慈光園	北豊	北九州サニーホーム		
第24期 2014（平成26）年度	北海道	釧路北病院	東京	還る家ともに（善了寺）	石川	特養）のとじま悠々ホーム
	大阪	特養）ビハーラ	大阪	社福）慶徳会	兵庫	特養）宝塚まどか園
	安芸	特養）慈光園	熊本	特養）バラ苑		
第25期 2015（平成27）年度	東京	還る家ともに（善了寺）	岐阜	特養）黒野あそか苑	東海	特養）陽光苑
	奈良	特養）美吉野園	大阪	社福）慶徳会	佐賀	特養）桂寿苑
第26期 2016（平成28）年度	東京	還る家ともに（善了寺）	岐阜	特養）黒野あそか苑	大阪	社福）慶徳会
	安芸	特養）慈光園	長崎	グループホーム静園		

ビハーラ活動者養成研修会修了者
僧侶・寺族・門徒別推移表（第１期・第19期～第26期）

開催年度					1987年度～1988年度				2008年度				2009年度				2010年度			
	教　区	全期合計				第１期				第19期				第20期				第21期			
		僧	寺	門	計	僧	寺	門	計	僧	寺	門	計	僧	寺	門	計	僧	寺	門	計
第1連区	北海道	42	7	13	62	2			2	1		1	2	2			2	2	1		3
	東　北	19	0	4	23				0				0	2			2				0
	東　京	32	1	13	46	1	1		2				0	1		1	2			2	2
	長　野	22	3	11	36			1	1			1	1			1	1				0
	国　府	22	4	3	29	1			1	1	1		2				0	1			1
	新　潟	22	3	1	26	2			2			1	1	1			1				0
第2連区	富　山	33	0	6	39				0	1			1				0	2			2
	高　岡	14	6	15	35	1			1				0	1			1	1	1		2
	石　川	16	1	16	33			1	1			3	3				0				0
	福　井	32	6	7	45	6			6	1			1	1			1				0
	岐　阜	21	5	17	43	3			3	1		1	2				0				0
	東　海	26	3	14	43	2			2				0	2		1	3				0
第3連区	滋　賀	26	7	7	40	1		1	2	1			1	3			3	1			1
	京　都	24	2	13	39				0	2			2			1	1	2		1	3
	奈　良	32	5	12	49	2			2	3		1	4	3	1		4	1			1
	大　阪	62	4	22	88	8			8	2		1	3	3		2	5	2			2
	和歌山	16	4	2	22				0				0				0	1		1	2
	兵　庫	53	3	17	73	5		1	6	2		1	3	3			3	3		1	4
第4連区	山　陰	37	9	14	60	4			4	3		1	4	1		2	3	1		1	2
	四　州	22	2	10	34	2		1	3	1			1				0				0
	備　後	20	6	12	38	3			3	1			1	3	2		5	2			2
	安　芸	45	5	9	59	2			2	2			2				0	1	1		2
	山　口	32	7	25	64	2			2	1		2	3				0	1	1	1	3
第5連区	北　豊	15	0	5	20				0				0				0	1		1	2
	福　岡	22	3	19	44	1			1		1		1			2	2				0
	大　分	25	5	3	33				0				0	1			1				0
	佐　賀	24	3	7	34	1			1			1	1	1			1	1			1
	長　崎	21	1	1	23	1			1	1			1				0				0
	熊　本	28	2	6	36	1			1	1			1				0	2			2
	宮　崎	13	4	8	25	1			1	1		1	2				0	1			1
	鹿児島	18	4	10	32	1			1				0				0			1	1
	沖　縄	2	2	0	4				0				0				0				0
教区外		6	0	4	10				0				0				0				0
計		844	117	326	1287	53	1	5	59	26	2	15	43	28	3	10	41	26	4	9	39
比　率（%）		66%	9%	25%	0	90%	2%	8%		76%	5%	35%		68%	7%	24%		67%	10%	23%	
平均年齢		46歳				41.7歳				47.9歳				45歳				44.7歳			

開催年度		2012年度				2013年度				2014年度				2015年度				2016年度			
	教　区	第22期				第23期				第24期				第25期				第26期			
		僧	寺	門	計	僧	寺	門	計	僧	寺	門	計	僧	寺	門	計	僧	寺	門	計
第1連区	北海道	2			2	2			2	2			2				0		1		1
	東　北				0				0				0				0	1			1
	東　京	5			5	1			1	2		1	3			1	1	1		1	2
	長　野	2			2	2	1		3				0			1	1				0
	国　府				0				0				0	2			2				0
	新　潟				0				0				0				0				0
第2連区	富　山	1			1	1			1				0				0				0
	高　岡				0			1	1				0				0				0
	石　川				0				0			1	1	1		1	2				0
	福　井		1		1	1			1	1			1	1			1	1			1
	岐　阜				0	2		1	3	1			1		1		1			1	1
	東　海				0				0				0	1		2	3				0
第3連区	滋　賀				0	1			1				0	2			2				0
	京　都			1	1	1			1	1		1	2				0	1			1
	奈　良	1			1	1			1				0	2			2	1			1
	大　阪	4	1		5	5			5	2	1	2	5	4		1	5	4		1	5
	和歌山	1			1				0				0	1			1				0
	兵　庫				0	1		1	2	2		1	3	1		1	2	1			1
第4連区	山　陰	1			1				0			2	2				0	2		2	4
	四　州				0	1			1				0				0				0
	備　後	1		1	2				0				0				0				0
	安　芸		1		1	5			5	2			2				0	2			2
	山　口	3			3			1	1	2			2	1		1	2	4			4
第5連区	北　豊	1		1	2	1			1				0				0				0
	福　岡	2		1	3	1			1	2			2	1		1	2			1	1
	大　分	1			1	1			1	1			1	1			1				1
	佐　賀	1			1				0				0				0				0
	長　崎				0				0				0				0	1			0
	熊　本				0		1		1				0				0				0
	宮　崎				0	1			1				0				0				0
	鹿児島				0				0	2		1	3			2	2				0
	沖　縄				0				0				0				0				0
教区外		3		1	4	2			2	1		1	2			1	1			1	1
計		29	3	5	37	30	2	4	36	21	1	10	32	18	1	12	31	19	1	7	27
比　率（%）		78%	8%	14%		83%	6%	11%		66%	3%	31%		58%	3%	39%		70%	4%	26%	
平均年齢		43.6歳				43.5歳				46.1歳				55.3歳				42.1歳			